

令和元年11月18日

現代における教養とは

大倉朗寛・池上惇

私は、1975年2月に大阪府大阪市阿倍野区昭和町で生まれて、大学卒業までの22年間、大阪府民・大阪市民として生活した。私が4歳の時に母と死別してから、パン屋を営む祖母とともに生活した。その後、大阪市立大学工学部機械工学科を卒業し、京セラへの就職をきっかけとして京都府宇治市の独身寮に入居してから16年半の間、京都府民として生活した。2003年4月からはIT関連事業で開業し、日本の全国各地と世界の各地を渡り歩き、創造の源泉を探し求めた。それから、2013年10月に奈良県奈良市に住民票を移し、奈良県民・奈良市民としての生活を開始してから現在まで約6年の歳月が流れた。

奈良での生活は、これまでの大阪や京都での生活と異なって単身ということもあり、それまでの人生とは違って比較的自由的な暮らしができたことから、仕事と日常生活においては、今まで以上に様々な立場や考え方の違う方々と関わることができ、各々との関わり合いの中から、また新たな人格を形成することができて視野が広がって深まり、精神的にも大きく成長することができたように実感している。

過去を振り返ってみると、京都での生活では、大阪での生活に比べて自己の考えを強調しながら、人と人とのつながりを厳選しつつ、その一本一本を深く濃くしてゆくという、いわゆる京都流の生き方をすすめた。そのために、知らず知らずのうちに、一つの考えや視点、物事に正解や不正解を求めてしまうような堅苦しい生き方や考え方に固執してしまうようになる傾向があった。そういったことを色々と思い出し、今更ながら、当時の自分の至らなさを深く反省せざるを得ない。ただ、その生き方や考え方を押し通した結果として、認識を共有することの大切さを知り得て、コモン・センスという、より高次の「共通」の認識という概念に到達することができたので、それはそれで非常に良い成果だったのではと、その点だけは当時の自分を評価してあげたい。

それに対して、奈良での生活では、奈良県民の地域性というか、古く奈良時代から続いてきた諸外国からの異なる文化の受け皿として、多彩な文化を許容して深化させてきた生活環境みたいなものを強く感じる日々であった。そして、より多彩な文化をお互いに尊重しあい、地域住民の肥えた目や耳などの五感で、いいものは守って残そうとし、そうでないものは自然に流れて、いつの間にか消え去ってゆくという、いかにも奈良らしい生活文化みたいなものを感じる毎日であった。

その中で、京都での生活とは真逆くらいに感じることはあった。それは、それぞれ自らとは異なる物事や考え方への寛容さである。もちろん、異なる物事や考え方へ迎合することはないが、単純に否定したり排除しようとするのではなく、しっかりと見極めて批評し、その批評を地域内で速やかに共有して、いいものは守って残してゆくという、より高次の「共通」

令和元年11月18日

の認識によって生活文化を守ってゆくという概念を、奈良での生活においても確かに感じることができた。

それと同時に、奈良県民・奈良市民による批評は、単なる批評でなくて、その内容をよく吟味してみると物事を前へ進める批評であることが多い。批評されたから否定されたので止めてほしいということではなくて、むしろ応援しようとする気持ちが批評となって、その気持ちが強ければ強いほど、より強い批評となる。このことをきちんと理解していないと、奈良での生活や仕事をうまくやってゆくことが難しいと感じた。その批評について、私は、アン・コモン・センスと呼んで、物事を前へ進めるために必要な新しい概念として捉えることとし、何事にも誠実に取り組んだ。その一方で、特に仕事の場においては、あえて認識を「共通」にせず、それぞれの立場や役割で必要な情報のみを共有して作業を進める方が結果として作業効率が上がるという、ノン・コモン・センスという概念も発見することができた。

つまり、現代における教養について考えるとき、いかにして多様な考え方や立場、価値観、生活習慣、人生観などをもつ方々の意見に傾聴し、その本質を理解して相互に共感しあえるような幅広い視野と深い見識を身に着けることがとても重要となる。ただ、その際に厄介なのは、自らの考えとは異なる意見や反対意見、無反応、無関心な方々の存在となるが、そういった方々に対して、どのように対処しつつ、物事が前へ進んでゆく力に変えてゆけるかが、また現代における教養の大切な一つの要素になっていると確信している。

なぜなら、SNSが普及した昨今、様々な考え方が瞬時かつ大規模に伝わってゆく現代社会において、自らの考えとは異なる意見や反対意見を力で抑えて消し去ろうとすることは、もはや不可能となっている。だからといって無視することもできないような状況となっている。そうであるならば、反対意見ですらも味方にしてしまうような視点や力量が、現代における教養に強く求められているといっても過言ではない。

それとともに、何でもかんでも認識を共有すればよいということではなく、何かしら協同で作業する場合においては、それぞれ異なる立場や役割で、それぞれ必要な情報のみを共有して、認識を「限定」して共有していった方が結果として効率がよい（生産性が向上する）ということを確認することもできた。つまり、このノン・コモン・センスという概念も物事を前へ進めることができる確かな力として存在していることを確信した。

もう少しわかりやすく表現すると、余計なことを考えて悩んだりして過ごす時間があれば、その時間で必要なことを必要なときに必要な分だけ頭に情報を入れて作業する方が、膨大な情報をもつ人よりも圧倒的に作業が早く物事が前へ進んでゆくということである。

今や、お客様が満足する「以上」のモノやサービスを開発したり提供するような時代ではなく、お客様が満足するモノやサービスを一秒でも早く提供できるかが勝負の分かれ目となっていて、そのように提供できた生産者が引き続き市場に残って、また次への生産活動を継続してゆくことができる。その継続した活動から生まれる余力の中にこそ、創造の源泉があるのであって、まったく異なるつながりや厳しい生存競争に残ってゆけないような物事

令和元年11月18日

や考え方の中に創造の源泉があるわけではない、つまり何かしらの共通点や共通の認識をもたないような異業種交流会には何の成果も期待できないということを改めて確信した。

したがって、現代における教養は、これら3種のコモン・センスという概念を、日々刻々と変化し続ける状況に応じて臨機応変に使い分けて、地域や企業、組織内の人的ネットワークを最適化しながら生産性を向上し、一人ひとりが幸せを日々実感できるような豊かな環境をつくり上げることができる力の一つとして、今後また注目が高まってくるであろう。

私自身の考えとしては、自らの考えと異なる意見や反対意見を力で抑えて消し去ろうとするような、そして争いがまた次の争いへと連鎖してゆくような古い時代に逆戻りして同じ過ちを繰り返すことがないように心から願っている。そして、3種のコモン・センスと相互の関連性という新しい概念で現代における教養を捉えなおして、令和の時代が心安らぐ時代となって、また次の時代へとつながってゆくことを願っている今日この頃である。ふと、そんなことを考えながら空を見上げると、京都の空には秋晴れの青空が澄み渡って広がり、さわやかな秋風を五感で感じる事ができた。それは、私にとっては、京都に来て間もない20代の若かりし頃に夢みたことが、40代になって、また一つ叶った至福の瞬間であった。

もし現代における教養について一つの結論を上げるとすれば、それは何事にも感謝すること、そして何もなく健康で平和な一日が過ごせたことに心から感謝できるような気持ちを、青く澄んだ秋晴れの空のような清らかな心で素直に持てるようになったときこそ、まさにそれが真の教養が身に着いた瞬間を意味するものと感じている。

現代における教養とは、他の誰かの何かと比べるものではなくて、過去の自分と比べて、どれだけ成長し、自分の「心」を磨くことができたかという「心」の広がりや深まりが最も重要で、その成長分こそが自分自身の教養ということになる。

そして、その過去から現在を結んだ線の延長線上に自分の明るい未来があるのであって、これからの自分が新たに目指すべき夢や希望、目標も、必ずその延長線上にある。すなわち、他の誰かと比べることなく、自分らしい夢や希望、目標をもって日々取り組むことができ、日々精一杯努力し続けてゆくことができるように発見できた「何か」が、現代における教養という視点からも、自分自身の人生の中で何よりも大切にしなければならない「道しるべ」となるのである。

人生で遭遇する全ての発端は自分の「心」の中にある。

自分の「心」が変われば、相手が変わり、社会が変わり、未来が変わる。

もしあなたが思い通りに行かなかったことを誰かや社会のせいにするのなら、

何も変わらないし、いつまでたっても明るい未来はやってこない。

もし変えられるとしたら今日から変わろう。いやまさに「今」から変わろう。

(約3760文字)